

特集

伝承の軌跡をたどる

歌舞伎が息づくまち成田

「成田屋」の屋号を名乗る歌舞伎役者・12代目市川團十郎(本名・堀越夏雄)さんが、今年2月に急逝しました。

生前の團十郎さんは、12代目襲名披露の練り歩き「お練り」を表参道で行ったり、成田山開基記念行事で、成田山新勝寺大本堂を舞台に演舞を奉納したりするなど、自身の人生の節目節目において本市を訪れ、成田との縁を大切にしていました。

市川團十郎と成田の結び付きは、さかのぼること約350年。初代團十郎の父、重蔵が本市幡谷出身であつたことに始まります。

跡継ぎになかなか恵まれなかった初代團十郎が、成田山新勝寺に祈願し、待望の子どもを授かって以来、團十郎と成田の縁は深まり、市川家の屋号を「成田屋」にしたといわれています。

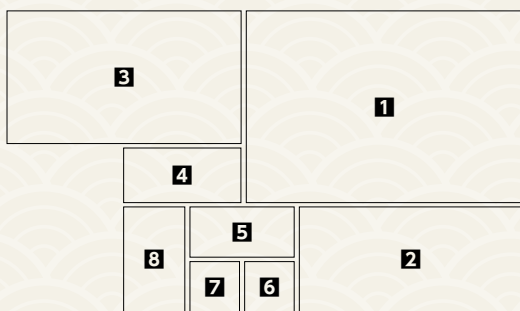


初代團十郎が江戸で活躍していたころ、全国を巡業する旅芝居により、地方にも歌舞伎の魅力の一端が伝わり、地元の人たちが自ら演じて楽しむ、「農村歌舞伎」と呼ばれる芝居が、盛んに上演されるようになりました。

実は成田には、北総地域で唯一現存する、「伊能歌舞伎」(市指定無形民俗文化財)という、約300年の歴史を持つ農村歌舞伎が息づいています。

昭和40(1965)年の公演を最後に上演が途絶えた「伊能歌舞伎」でしたが、数々の試練を克服し平成11(1999)年に復活。現在も定期的に公演を行っています。

「市川團十郎」と「伊能歌舞伎」。由緒・由縁は大きく異なりますが、今回の特集では、代々の「市川團十郎」と成田との連綿と続く深い縁。そして「伊能歌舞伎」の過去・現在・未来を通して、先人から伝統を受け継ぎ、守り、後世に伝えるために、幾多もの困難を乗り越え今に至る…その軌跡をひも解き、振り返ってみました。



1 成田山開基1070年を記念し、12代目市川團十郎さん(左)と長男の11代目市川老蔵さんが、成田山新勝寺大本堂を舞台に「連獅子」を奉納

2 成田山棟上図(中央の老人が7代目團十郎)(成田山霊光館所蔵)

3 十松が鶴千代の代わりに命を絶たれる(伽羅先代萩)

4 三浦之助義村、佐々木高綱、時姫のそらい踏み(鎌倉三代記)

5 小槇がなざなで立ち回り(伽羅先代萩)

6 7代目團十郎が寄進した額堂は昭和40(1965)年に不審火で焼失。写真の現在の額堂(国指定重要文化財)は、文久元(1861)年に2番目の額堂として建立

7 現在の額堂の中央部にある7代目團十郎の等身大の石像

8 8代目團十郎の宮参りの図(成田山霊光館所蔵)

* **3 4 5**は、第15回伊能歌舞伎定期公演から



代々の「市川團十郎」と成田 その連綿と続く深い縁

数ある歌舞伎役者の名跡みょうせきのなかでも、最も権威のある名といわれている「市川團十郎」。伝承の危機にさらされるたびに浮かび上がる成田との縁。その結び付きとは。

市川團十郎と成田の悠久の歴史

初代團十郎と2代目團十郎
成田との縁の礎を築く

初代團十郎は、万治3(1660)年、幡合村(現成田市)出身の堀越重蔵の子として誕生。

14歳の若さで初舞台を踏み、豪放な英雄が悪を懲らしめる筋骨きの中で、主役の武士や鬼神などの荒々しさを誇張して演じる「荒事」を創作し、自ら演じました。

「荒事」は、後に市川家のお家芸となるほど人気が高まり、演じる初代團十郎は、江戸の人たちに絶大な影響力を持つようになりました。

さらに、「暫」しばらく「鳴神」なるかみ「不破」ふわと

いった、後の「歌舞伎十八番」の原型となる傑作を次々と演じ、歌舞伎界の第一人者として絶賛されていました。

しかし、期待されていた跡継ぎになかなか恵まれず、自身の芸を何とか伝承したいと切望した初代團十郎は、父親の出身地に近く縁のあった成田山新勝寺(以下、成田山)に祈願したところ、元禄元(1688)年に、男の子(2代目團十郎)を授かることができました。

このことに深く感謝した初代團十郎が、成田山の本尊である不動明王をたびたび演じ、また、「成田山分身不動」という演目を創作

2代目市川團十郎

清峰画(成田山霊光館所蔵)

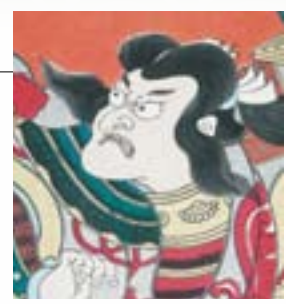
「荒事」に積極的に挑戦したほか、男女の恋愛描写を描いた「和事」にも取り組み、演技の幅を広げ、後に「歌舞伎十八番」に制定される演目の多くを創作。不動明王を題材にした舞台が大当たりしたことに感謝し、成田山に、寺社に祭る神鏡などを寄進。



初代市川團十郎

「暫」の図(成田山霊光館所蔵)

感情の高まりなどを表現するために、演技の途中で一瞬顔の表情や動きを止めてにらむ「見得」、人物の性格や表情などを強調するために、紅と墨とで顔を彩る「隈取」といった、今でも使われ続けている歌舞伎独特の演技や化粧法を編み出す。





7代目市川團十郎

「勸進帳」での弁慶(成田山霊光館所蔵)

不動明王を演じる「不動」をはじめ、現在も人気が高くなびたび上演される「暫」「助六」「勸進帳」。これら代々の團十郎が得意とした演目をまとめた「歌舞伎十八番」を制定するなど、歌舞伎界における「市川團十郎」の存在を確固たるものにした。

8代目市川團十郎

3代豊国画(成田山霊光館所蔵)

天性の美貌と素質により高い人気を誇った。父が江戸を追放された際、残された弟妹の面倒を見ながら、成田山の不動明王の出張所に、毎日のように父の無事と赦免を祈願していたという。それらの善行が町奉行に認められ褒美と与えられるなど、親孝行としても有名。



7代目團十郎が常連客に配った「歌舞伎十八番制定の刷り物」(成田山霊光館所蔵)

歌舞伎と縁の深い場所がここにも

～義民・佐倉宗吾を祭る宗吾霊堂～

公津村(現成田市)の名主だった佐倉宗吾(木内惣五郎)は、承応元(1652)年、凶作と重税に苦しむ農民を救うため、将軍への直訴を決行し、その罪により処刑されました。その佐倉宗吾の伝記を脚色した「佐倉義民伝」は、歌舞伎の舞台で何度も上演されています。



9代目松本幸四郎さんが舞台の成功を祈願



7代目團十郎の成田参詣図(成田山霊光館所蔵)

し、親子で共演したことにより、成田山が江戸の人たちに注目されるようになりました。

後に不動明王を演じた「不動」という演目は、市川家の「十八番」の一つとなりました。

「十八番」と書いて「おはこ」と読むのは、市川家が得意とした18演目を、「お箱」に入れて大切に代々受け継いでいく習わしがあることに由来しています。

以来、市川家と成田の結び付きは強まり、初代團十郎は2代目團十郎を「成田山の申し子」と呼び、市川家の屋号を「成田屋」にしたといわれています。

7代目團十郎と8代目團十郎

村人のために、成田村(現成田市)で奉納芝居を行うなど、市川家の、成田の人たちへの感謝の気持ちは強いものがあつたようです。

天保13(1842)年、儉約を美德とする奢侈禁止令により、歌舞伎で使う小道具や衣装がぜいたくであるという理由などから、7代目團十郎は江戸を追放されましたが、その時身を寄せたのは成田村でした。成田山内にある延命院で生活を送ることになった7代目團十郎は、村人と句会を催したり、子どもに芝居を教えたりするなど、成田周辺地域の文化の向上に大きく貢献したといわれています。

代を重ねるごとに市川家と成田の結び付きは深まりますが、7代目團十郎は、文政4(1821)年に私費千両を投じて成田山に額堂を寄進するなど、その結び付きはとりわけ顕著でした。

7代目團十郎もまた跡継ぎに恵まれず、初代團十郎に倣い、成田山に祈願したところ、文政6(1823)年に、男の子(8代目團十郎)を授かりました。成田山への感謝はもちろんのこと、江戸の舞台を観に行くことができない

12代目市川團十郎さんと共に歩んだ成田

12代目團十郎

「成田との縁をこれからも」

12代目市川團十郎さんは、昭和21（1946）年に生まれ、7歳で初舞台を踏みました。

昭和44（1969）年に10代目市川海老蔵を襲名し、昭和60（1985）年に12代目市川團十郎を襲名。自身の襲名披露など、市川家の慶事に際して成田山への報告を欠かさず、折に触れて成田を訪問。

成田市制施行50周年を迎えた平成16（2004）年には、「広く市民に敬愛され、社会に明るい希望

と活力を与えとともに成田市の名を高めることに顕著な功績があった」として、成田市市民栄誉賞を受賞。

平成20（2008）年には、成田山開基1070年を記念し、長男の11代目市川海老蔵（本名・堀越孝俊）さんと共に表参道で「お練り」を行い、親子で「連獅子」を奉納しました。

さらには、毎年大みそかに家族で成田を訪れ、1月1日午前0時からの御護摩祈禱を成田山で受けるなど、代々の團十郎と変わらな

く白血病という病魔と闘って



「ありがとう十二代目市川團十郎丈」と記された幕を、成田祇園祭では、全ての山車・屋台の正面に掲げた

きた12代目團十郎さん。パリ・オペラ座で初の歌舞伎公演を実現し、日本の伝統文化を世界に広める役割を果たし、また、白血病患者を勇気づけるために自身の歌舞伎の公演に招待し、社会貢献に力を注ぐなど、病を押して精力的に活動が続けていました。

また、お家芸を伝承するために、「歌舞伎十八番」や上演が途絶えている演目の復活、後継者の育成に並々ならぬ情熱を注いでいたことで知られています。

代々の團十郎のほとんどは、お家芸の伝承、そして跡継ぎの育成に苦勞してきたようです。これは、

Interview

インタビュー



成田山新勝寺 企画調整課
寺口 照慧さん

12代目市川團十郎さん 親子と接して

○12代目市川團十郎さんの人柄は

昨年11月、12代目市川團十郎さんが成田山新勝寺に参詣にいらしたときに、境内を案内する係の1人として同行しました。くしくも、その時の来山が最後となってしまったのですが、奥様を乗せて、ご自身で車を運転してきたくらいで、体調不良など微塵も感じられませんでした。当日、御護摩修行での凜とした佇まいからは、市川家の威厳を感じました。やはり、苦勞を重ねていらしたからでしょうか、わたしのような一担当者にも氣遣いの言葉をいただき、心温かい人柄を

間近に感じることができ、貴重な時間を過ごさせていただき、感謝しております。

○11代目市川海老蔵さんとの縁は

実は以前、11代目市川海老蔵さんと一緒に参籠修行を行ったことがあるのですが、修行中の真剣な姿勢はもちろん、普段の立ち居振る舞いからも、市川家を受け継ぐ者ならではの威厳と気品、そして頼もしさを感じられました。わたしと年齢が近いにもかかわらず、その意識の高さに圧倒されたことを覚えています。今年3月に誕生した長男・勘玄さんと成田との縁も、深めていければ素晴らしいですね。ゆくゆくは襲名披露の時など、表参道で「お練り」が行われるのでしょうか、今から楽しみです。その時には、市民の皆さんにも協力していただき、成田のまち全体で、盛り上げてほしいですね。市川團十郎、ひいては歌舞伎界と成田のますますの結び付きは、市民の皆さんの温かい力添えがあってこそだと思っています。



色とりどりの紙吹雪に包まれて



11代目市川老蔵さん夫妻が、成田山で結婚奉告



成田山開基1070年を記念し、親子で表参道を「お練り」

12代目市川團十郎さんから 農村歌舞伎にメッセージ

「伊能歌舞伎」を題材として「農村歌舞伎の復活・再生から創造へ」をテーマに、平成23(2011)年に本市で開催された「全国地芝居サミット」に、農村歌舞伎にも造詣が深い12代目市川團十郎さんから、温かいメッセージが寄せられました。

本日ここに、第二十一回全国地芝居サミットが成田市において盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます

日本各地に江戸時代より伝承されてきた農村歌舞伎が関係各位のご支援・ご協力のもとに定着し、後継者育成においても多大なるご尽力を賜り、確実に次世代へ受け継がれていることに敬意と感謝を申し上げます

さて農村歌舞伎の支援・育成には当家におきましても各地の保存会の皆様との交流を深めてまいりましたが当家ゆかりの成田においてサミットが開催されますことは誠に感慨深く今後の隆盛を願わずにはおれません

本日全国各地からお集まりの皆様には^{なお}尚一層のご活躍とご多幸を心よりご祈念申し上げ私のお祝いのごあいさつといたします

市川團十郎
(*原文のまま掲載)

歌舞伎をはじめとする伝統芸能に通じる、長きにわたる悩みであり課題であるのかもしれない。今年2月に急逝。7月に行われた「成田祇園祭」では、全ての山車・屋台の正面に「ありがとう十二代目市川團十郎丈」と記された幕が、追悼と感謝の気持ちを込めて掲げられました。さらに9月には、成田観光館で、数々の写真や映像で12代目團十郎さんの活躍を振り返る企画展が、約1カ月にわたり開催され、

延べ4、500人以上の人が訪れ、その人柄をしのびました。11代目海老蔵さんにとっても、成田は特別な地であり、平成16(2004)年に表参道で襲名披露の「お練り」を、平成22(2010)年には成田山に自身の結婚奉告を行っています。また、父親である12代目團十郎さんの病気の平癒を願い、今年2月の「成田山節分会」で豆まきに参加するなど、変わらず成田との縁は受け継がれています。



成田観光館で團十郎ゆかりの品々を展示

古来、成田の地に 受け継がれる「伊能歌舞伎」



ほんちようにじゅうしこう
『本朝廿四考』(昭和24年4月公演)



おうれあだちがはら
『奥州安達原』(昭和14年4月公演)



昭和23年4月の大須賀大神の例大祭(坂戸恒夫さん所蔵)

300年の歴史を誇る「伊能歌舞伎」。一度途切れてしまった伝統をよみがえらせた人たちの情熱は。そして将来を見据える力強い視線の先には…。

成田に脈々と息づく伊能歌舞伎

農村歌舞伎が成田にも

初代團十郎が江戸で活躍していたころ、歌舞伎は京都や大阪など、ほかの大都市でも人気を博していましたが、地方を巡業する旅芝居により、成田にもその魅力の一端が伝えられました。

やがて、旅芝居の役者が演じる舞台を見物するだけでは飽き足らず、地元の人たちが自ら演じて楽しむ「農村歌舞伎」と呼ばれる芝居が、成田でも盛んに上演されるようになりました。

中でも大栄地区は、伊能のほか、前林・吉岡・津富浦・松子・馬乗里でも歌舞伎が上演されるなど、

関東近郊でも有数の農村歌舞伎が盛んな地区であったようです。

愛され続ける伊能歌舞伎

伊能歌舞伎は、おおすかだいじん大須賀大神伊能の例大祭の奉納芝居として約300年の歴史を持つ、成田を代表する伝統芸能の一つで、県内でも、ほかに館山市にしか現存しない農村歌舞伎です。

農村歌舞伎は、江戸時代半ばに行われた享保の改革により、風紀を乱すとの理由で禁じられました。が、神社の祭礼で奉納するという名目で、境内に舞台を建てて、上演し続けた地域が数多くありました。



伊能歌舞伎復活後の大須賀大神の例大祭(平成18年4月)

途切れた歴史

伊能歌舞伎は、昭和36(1961)年には、県指定無形民俗文化財に指定されるなど、その伝統的な価値が広く認められていました。

成田でも、禁令にもかかわらず、大須賀大神の例大祭の名の下に伊能歌舞伎の上演を続けました。数少ない地元の娯楽であった例大祭は、いつしか親しみを込めて「伊能のおあそび」と呼ばれるようになり、今もなお、境内に設置された舞台で毎年4月、伊能歌舞伎保存会による歌舞伎公演が行われています。

34年ぶりの復活への第一歩

また、毎年11月には、大栄公民館を会場に、伊能歌舞伎の定期公演が開催されています。

平成8(1996)年、旧大栄町が、文化遺産の継承と地域文化の振興をまちづくりの目標の一つに据え、伊能歌舞伎について研究を始めたことをきっかけに、復活への気運が高まりました。

「以前、伊能歌舞伎に携わっていた人たちの、もう一度芝居をしたいという気持ち。そして、眠っている固有の伝統文化に再び光を当てて、地元を盛り上げたいと願う伊能の人たちの思いが、復活を後押ししたのでは」と話すのは、伊能歌舞伎保存会会長を務める宮野茂さん。

平成10(1998)年、伊能歌舞伎保存会が結成。復活に向けて、大きな一歩を踏み出しました。

繰り返された必死の稽古

しかし、一度途切れてしまった伝統をよみがえらせる取り組みは、

困難を極めました。

舞台に必要な大道具・小道具は腕に自信がある会員が手作りし、生け垣は植木に通じた会員が調達するなど、あらゆる手だては尽くしましたが、一番の問題は、30年以上の空白を埋める、演技の指導者の確保でした。

専門家の協力を仰いだ結果、白羽の矢が立ったのは、群馬県前橋市で農村歌舞伎の指導を行う山畠玲子さんでした。

公演の半年前から毎月4日間連続で稽古が行われ、家では、せりふや動きを何度もおさらいする。

同じ演目の歌舞伎や関東近郊の農村歌舞伎を鑑賞して研究を重ねては自分の演技を見直し、さらに腕を磨く。

復活に携わった人たちは皆、歌舞伎漬けの日々を送りました。

そして迎えた平成11(1999)年11月28日。大栄公民館で満員の観客が見守る中、伊能歌舞伎は、34年ぶりに復活を果たしました。

さらに平成13(2001)年には大須賀大神の例大祭で上演され、奉納芝居という伊能歌舞伎本来の姿を取り戻すまでに。

伊能歌舞伎復活に懸けた人たちの強い思いが、成就した瞬間でした。

Interview

インタビュー



伊能歌舞伎指導者
(師匠・市川劇団)
山畠 玲子さん

皆さんの伝統を大切に思う
気持ちが頼もしいですね

○復活公演までの道のりは

伊能歌舞伎は、30年以上公演から遠ざかっていたので、指導はゼロからのスタートのようなものでした。しかし、伊能の皆さんの歌舞伎に懸ける熱意は並々ならぬものがありましたので、わたしもその熱意に応えるべく、びしびし指導させてもらいました。

○復活当初から「子ども歌舞伎」も手掛けたそうですが

伊能歌舞伎を長く存続させていくには、後継者の育成が欠かせません。子どもは覚えが早く、見る見る上達していくのが分かります。将来が楽しみです。

伊能歌舞伎保存会
(伽羅先代萩 政岡役)
坂戸 恒夫さん



あのころのにぎわいを
もう一度取り戻したいですね

○昭和20年代の例大祭は

当時はほかにあまり娯楽がありませんでしたから、例大祭が始まると、遊びに来た人が大須賀大神の境内に入りきれないほどのにぎわいをみせていました。ラジオで伊能歌舞伎が中継されたこともありましたね。

○復活にあたって

縁あって、山畠玲子さんに師匠を引き受けていただき、今も指導をお願いしています。当時の指導は、かなり厳しかったのですが、そのおかげで伊能歌舞伎が復活できたので、心から感謝しています。



いかに憎らしく見せるかが腕の見せどころ
(伽羅先代萩)



師匠の振り付けを体にとたき込む(鎌倉三代記)



観客にアピールする重要な場面(鎌倉三代記)



大人の芝居をのぞき込む子役の2人(伽羅先代萩)

歩み続ける伊能歌舞伎

ある日の稽古風景1

大栄地域福祉センターの二室で、

第15回伊能歌舞伎定期公演を1

カ月後に控えた10月のある日。

夜の帳が下りるころ、静寂に包

まれた稽古場に一人二人と役者が

集まり始めます。やがて明かりが

ともり、よく通る役者のせりふが

響き渡ると、稽古場は一気に熱を

帯びだします。

歌舞伎には教科書がなく、身ぶ

り手ぶりや口伝えで、動きなどを

体で覚えていきます。

教える方も教わる方も真剣その

もので、何度も何度も繰り返し

自分のものにしていきます。一人

一人のもっと上手に演技したいとい

う強い気持ちで、さらに稽古場を

熱くします。

台風被害を乗り越えて

市内に深い爪痕を残した台風26号。本市に最接近したのは、定期公演入場券配布初日の10月16日の午前中でした。

朝から豪雨と暴風に見舞われたにもかかわらず、大栄公民館では、配布開始の1時間以上前から入場

券を求める人たちが詰め掛け、伊能歌舞伎の変わらない人気に保存会会員は皆、喜びにあふれていました。

しかし喜びもつかの間、稽古場兼道具一時保管場所として利用していた大栄地域福祉センターの裏山が崩れ、室内に土砂が流入。稽古場が使用不可能となり、大道具の一部が水に漬かる被害が発生しました。

公演の実施が危ぶまれる事態にもかかわらず、会員たちは、楽しみにしている人たちの思い、落ち込んでいる暇はないと気持ちを切り替え、早速、稽古場の確保や道具の修復などに取り掛かっていました。

ある日の稽古風景2

定期公演間近の大栄公民館で、

定期公演を週末に控えたある日。

山畠さんをはじめ三味線や義太夫を招き、本番さながらのこの日の稽古は、約1カ月ぶりに山畠さんの指導を受けるとあって、緊張感に満ち、気合いがこもった演技の応酬が繰り広げられました。

「客席に顔を向けて演技して」

子役に聞きました

伽羅先代萩 千松役
成毛 野々花さん(小学2年生)

お姉ちゃんがお芝居しているのを見て、カッコいいなと思って、わたしも歌舞伎を始めました。たくさんの人に自分のお芝居を見てもらおうのが楽しいです。



伽羅先代萩 鶴千代役
高松 菜々子さん(小学1年生)

5歳のころから歌舞伎をやっています。せりふを覚えるのは大変だけど、お芝居するのは楽しいです。もうひとつのお芝居には、おじいちゃんも出ているんだよ。



Interview

インタビュー



伊能歌舞伎保存会
(伽羅先代萩 小唄役)
ほりこし しゅうち
堀越 修一さん

300年の歴史を持つ
伝統芸能が身近に
あるって素晴らしい

○保存会に加入したきっかけは

わたしは4年前まで、伊能地区にある大須賀小学校に勤務していました。何人もの教え子が伊能歌舞伎の舞台で活躍している様子を間近で見ましたし、もともと伊能地区に住んでいて、歴史が好きだったこともあり、興味を持っていました。平成23(2011)年に成田で「全国地芝居サミット」が開催されるのを機に、本格的に携わるのは「今しかない」と思い加入しました。

○伊能歌舞伎の素晴らしさは

成田に、300年の歴史を持つ伊能歌舞伎が受け継がれているということは、とても貴重なことだと思います。歴史的価値の高い文化に触れられる、またとないチャンスです。しかも公演は無料なんです。ぜひ、たくさんの人に舞台を見に来てもらい、伊能歌舞伎の素晴らしさを感じてほしいですね。

伊能歌舞伎保存会
(音響・照明担当)
おがわ ともゆき
小川 知幸さん



裏方も役者もやりがいがあり
楽しいです

○音響・照明で苦労するところは

稽古のときは、音を出すタイミングや光を当てるタイミングを計るため、役者の皆さんが演じている脇で、せりふや動きと台本を照らし合わせながら、ポイントを確認しています。いくら役者の演技が完璧でも、音響や照明のタイミングがずれてしまうと、舞台を台無しにしかねないので、いつも緊張感を持って取り組んでいます。

○伊能歌舞伎の魅力は

普段は裏方をしていますが、実は、何度か舞台に上がったこともあるんですよ。脇役でせりふもほとんどありませんでしたが、いざ舞台に立つと、楽しくて仕方がありませんでした。化粧をし、舞台用の衣装を身にまとうことで別人に変身でき、思い切って演じることができます。皆さんにもぜひ一度、この気持ち良さを味わってほしいですね。



どう、カッコいい?



見る見る変身していく2人



お礼口上で定期公演が大団円を迎えた

舞台の幕が上がって

定期公演当日の11月17日。会場の大栄公民館プラザホールは、開演を今か今かと待ちわびる500人近くの観客の熱気に包まれました。

入場の受け付けや会場の案内などを手伝うために駆け付けた、伊能歌舞伎後援会の会員も、その熱気に圧倒されるほどでした。

舞台裏では、「始まったばかり

「もっと声を張って」と、山嵐さんから熱のこもった指導が入るたび、役者は、せりふや一つ一つの動きを丁寧に戻っていました。

直しはきかない。思い切つてやるだけ。本番は楽しんだらいいよ」と山嵐さんにハッパを掛けられ、気合いが入る役者の面々。

そして午前10時、開演。

知り合いの役者が舞台に現れる

と、近所から駆け付けた観客から掛け声が掛かったり、舞台上から役者が観客に拍手を促したりと、地元根差した伊能歌舞伎ならではの温かい空気に包まれたまま、舞台の幕は下りました。

現在、年2回の公演のほかに、各地から公演依頼が舞い込むほどに成長した伊能歌舞伎。

しかし、ほかの農村歌舞伎と同

じように、役者の高齢化や後継者不足の問題も…。

伊能歌舞伎保存会には、現在30人ほどが参加。今では、伊能地区以外の会員も増え、職業・年齢も多岐にわたっています。

会員だけで稽古を行うことができようにはなりませんが、三味線や義太夫、化粧や着付けなどはまだ、外部の専門家に頼むしかありません。

全てを自らの手でこなす上演するまでには、乗り越えなければならぬ高い壁が幾つもあります。伊能歌舞伎の挑戦はこれからも続きます。

伝統の舞台、ここにお目見え



第15回伊能歌舞伎定期公演
11月17日(日) 大栄公民館プラザホール



1



2



3



4

復活公演から今回で15回を数える伊能歌舞伎の定期公演。幾多もの困難を乗り越えてきた伝承の重みを感じながら、役者たちは全力で演じました。

演目紹介

さんばそう
三番叟

舞台の幕が上がり、最初に舞うことで舞台を清める

伽羅先代萩 「御殿の場・床下の場」

江戸時代の仙台藩伊達家のお家騒動を題材とした作品。乳母・政岡が、自分の子・千松を犠牲にして、幼い主君・鶴千代を、乗っ取りをたくらむ悪人一派から守る物語

鎌倉三代記 「絹川村閑居の場」

若武者・三浦之助義村が、重病の母に一目会いたいと戦場から駆け付けると、敵方の大将である北条時政の娘・時姫が熱心に母を看病していた。夫婦になりたかったら父・時政を討てと言われ、父と恋人との板挟みになる時姫の苦悩が見どころの一つの物語

1 八汐が千松のとどめを刺しに(伽羅先代萩)

2 三浦之助義村、佐々木高綱の大見得(鎌倉三代記)

3 政岡が千松の敵を討つ(伽羅先代萩)

4 毒が盛られた菓子を食べる千松(伽羅先代萩)

5 富田六郎をやりで突く佐々木高綱(鎌倉三代記)



5



みやの しげる
伊能歌舞伎保存会会長 宮野 茂さん

歌舞伎とともに歩み続ける

子どものころから身近にあった伊能歌舞伎。一度途切れた伝統をよみがえらせる難しさは身に染みんでいます。今は、後世への伝承に全力を注いでいます。

〇復活後、15回目の公演を終えて

伊能歌舞伎の伝統を後世に伝承するのは、わたしたち保存会の大切な役割だと思っています。これからも自信と誇りを持って、芸に励んでいきたいと考えています。

今回は2人の子役が出演してくれました。稽古にも一生懸命取り組んでくれ、逆にわたしたち大人も、もっと頑張らなくてはと刺激を受けました。お互いに、稽古を通して得た知識や経験が、次の舞台にも生かされるのが楽しみです。

地域のつながりが希薄になりつつあるといわれる今だからこそ、地元の人たちが、世代を超えて協力して舞台を作り上げることが、ふるさとの歴史を支える礎の一つになるのではないかと、あらためて感じます。

〇伊能歌舞伎のこれから

以前、たまたま稽古を見に来た女子中学

※伊能歌舞伎について詳しくは伊能歌舞伎保存会事務局(☎090-7205-0441)へ。伊能歌舞伎を応援したい人は伊能歌舞伎後援会事務局(☎73-2930または☎090-9325-7458)へ。

生から、参加したいと申し出があり、次の公演で実際に舞台に立つてもらったことがありました。歌舞伎の魅力を感じてもらったためには、まず何より、舞台を見てもらうことが大切なんだと強く感じました。

公演を毎年続けている意義は、ここにもあります。

また伊能歌舞伎にちなみ、地域ブランドの向上を目指し「伊能歌舞伎米」と名付けた米が販売されています。12代目市川團十郎さんをはじめ、成田に縁がある歌舞伎役者の人たちに届けたこともあるんですよ。

伊能歌舞伎米との相乗効果で、伊能歌舞伎の知名度をアップさせていきたいですね。

〇市民の皆さんへ

苦勞の末に復活した伊能歌舞伎ですが、心配なのは、役者をはじめ裏方を含めた後継者不足。三味線や義太夫、化粧や着付けなどは、後継者がいないため、外部の人をお願いしている状況です。

伊能歌舞伎保存会では、住所・年齢・性別を問わず、少しでも歌舞伎に興味を持ってもらえたら、どのような形でもいいので参加してもらえる人を募集しています。

稽古は自由に見学できますし、今年から定期公演前日リハーサルの公開も始めました。

皆さんぜひ一度、長きにわたり成田に息づく伊能歌舞伎に触れてみませんか。

取材を終えて

今年2月、成田と深い縁で結ばれていた歌舞伎役者・12代目市川團十郎さんが急逝し、多くの市民が悲しみに包まれました。代々の市川團十郎の歴史をひも解いてみると、伝承することの困難さ、そしてその困難を乗り越えるたびに深まる成田との縁が浮かび上がりました。

一方で、伊能歌舞伎の過去・現在・未来を通して見ると、形は違えど、同じく伝承することの困難さ、そして困難を乗り越える地元の人たちの力強さが見えてきました。歌舞伎は、成田に住むわたしたちにとって、ふるさとの誇りであるばかりでなく、地域の文化・芸術を成長させ、地域を活性化させる礎の一つといえるのかもしれない。

これからも脈々と続くであろう「市川團十郎」と成田の縁。そして、未来に向けて歩み続ける「伊能歌舞伎」。

地元で息づく歌舞伎から感じられる、伝統を守り新しい世代に受け継いでいくことする力。

この力強さが、成田というまちの未来に向けた、より一層の成長・発展の原動力の一つになっていくのではないのでしょうか。

参考文献

「成田山史」(成田山新勝寺 小嶋照本)
「新修成田山史」(成田山新勝寺 神崎照恵)
取材協力 成田山新勝寺、伊能歌舞伎保存会